

氏名	うえだ かおり 上田 香
学位(専攻分野)	博士(学術)
学位記番号	博甲第813号
学位授与の日付	平成28年9月26日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	工芸科学研究科 造形科学専攻
学位論文題目	有松絞りに見る伝統工芸の歴史的変遷
審査委員	(主査)教授 並木誠士 教授 櫛 勝彦 教授 浦川 宏 准教授 平芳幸浩 京都女子大学家政学部生活造形学科・准教授 青木美保子

論文内容の要旨

本論文は、愛知県名古屋市緑区有松地区の伝統工芸品である「有松絞り」について、有松絞りの技法、意匠、生産体制が、地域のなかで時代の変化に対応して、どのように変遷したのかを、浮世絵調査、海外現地調査等の手法を用いて分析、検証している。

論文は序章、終章を含む七章で構成されており、別に関連論文「竹田嘉兵衛商店所蔵有松絞りのデジタルアーカイブ作成と分析」が添えられている。

第1章「有松絞りの歴史」では、先行研究にもとづき、江戸時代以降現代にいたるまでの有松絞りの歴史を概観する。

第2章「浮世絵に見る有松絞りの発展(江戸時代)」では、現存遺品がない江戸時代の有松絞りについて考察するために、喜多川歌麿と歌川国芳という多作で知られる二人の浮世絵師の作品を、美術全集、展覧会図録等から抽出し、そこに見られる有松絞りと思われる衣装の文様構成、色、使用方法を分析している。また、江戸時代の風俗を記した『守貞謾稿』をはじめとする文献史料も用いて、江戸時代における有松絞りの様相を明らかにする。画中画資料という限界はあるものの、時期の異なる二人の作品を分析することにより、さまざまな文様の盛衰を、数字で示すことに成功している。

第3章「嵐絞りの盛衰—営業独占権喪失がもたらした技術革新(明治時代から戦前)」では、明治時代にはいり、尾張藩の庇護がなくなり、営業独占権が奪われた有松において、積極的に新規技法開発に注力して、「嵐絞り」をはじめとする世界的にも類を見ない器具や機械を用いる斬新な絞り技法を開発した様相を明らかにしている。絞り染めの「産業革命」といえる時期についての詳細な分析で、なかでも嵐絞りに焦点を当てて論を進める。嵐絞りは、この時代に大流行した技法で、百種類以上の技法があったと伝えられており、男性用浴衣や生活雑貨等に広く用いられたが、従来の女性の括り手を中心とした「女性内職方式」の生産体制と異なり、「男性工場方式」で生産されたため、戦後の人手不足による技法の消滅につながった点を指摘する。

第4章「着物文化の衰退と海外生産委託(戦後)」では、最盛期には愛知県内に約10万人いたとされる括り手も、戦後の人件費の高騰と人手不足により激減し、括り手を海外に求めざるをえない状況に追い込まれた有松が、海外生産委託を開始する状況について、中国での現地調査の成

果を踏まえて論述される。1980年代より始まった、少数民族（ペー族）により古くから絞り染めがおこなわれていた中国雲南省への生産委託により、有松絞りの精緻さが失われ、意匠的にも有松絞りのオリジナリティーを損なう日中ハーフ化を招く結果となり、その製品が土産物として有松の街角にならぶ事態となった点が指摘される。

第5章「有松絞りの新しい取り組みと課題（現代）」では、若手デザイナーの新商品に用いられる絞り技法を分析し、それが短時間で括ることが可能な手蜘蛛絞りや板締め絞りなど、絞り業界の創業期の簡素な技法に回帰している点を指摘する。また、手間のかかる技法を用いた高級品を海外生産委託に頼って維持をする傾向も指摘し、町並み保全による観光地化、海外進出との関係を含め、業界が模索している状況が具体例を通して示される。

論文審査の結果の要旨

本論文は、愛知県の伝統工芸である有松絞りについてのはじめての包括的な研究である。江戸時代より有松地方の絞りは街道の土産としてひろく知られていたにもかかわらず、申請者も序章で示すように、1972年に刊行された岡田精三『有松志ぼり』以外研究書が存在しないのが現状である。

本論文は、そのような有松絞りについて、江戸時代から現代にいたるまでの変遷を丹念に追っている。その点が、本論文の最大の功績である。しかも、資料に乏しい江戸時代の様相については浮世絵などの絵画史料を駆使し、多様な染め技法がわずかに伝存している明治時代からの様相については、現地での伝存作品調査とそのデータベース化、ヒアリング調査、生産委託をするようになった中国雲南省での現地調査、絞りの現代的な活用については、ファンションの現場におけるアンケート調査というように、それぞれの時代を考察するにふさわしい方法論を用いて調査・研究をおこなっている。このような作業を通して、有松絞りの歴史と現在を明確に打ち出した点で、本論文の学術的価値は大きい。また、失われつつある伝統産業の保存・活用という今日的な課題に対しても、現状分析にもとづいた提言をおこなっており、この点は有松絞り以外の伝統工芸・伝統産業を考えるうえでも有益な視点を提供している。

以上のように、本論文は、綿密な調査と現状分析に裏付けられた視点から伝統産業の歴史的・今日的意義を明確に示しており、有松絞り論としても伝統産業論としても、あらたな地平をひらいたものとして評価できる。

なお、本論文の一部は、いずれも申請者の単著である査読付の2論文（①②）および共著である査読無しの論文（③④⑤）として、すでに公表されている。

①上田香：「嵐絞り」の盛衰に見る伝統工芸の新技法の必要性と課題」意匠学会『デザイン理論』第64号、23-36頁（2014年）

②上田香：「中国雲南省への有松絞り生産委託の実態と意匠への影響」意匠学会『デザイン理論』第67号、17-39頁（2015年）

③上田香、藤木庸介：「有松絞りのデジタルアーカイブ作成とその分析および活用」『京都嵯峨芸術大学紀要』38号、23-33頁（2013年）

④藤木庸介、宮尾学、上田香、彭帆：「日本伝統工芸におけるサプライヤー・システムとプロダク

ト生産の実態—愛知県「有松絞り」を事例として—』『滋賀県立大学人間文化学部研究報告 人間文化』35号、40-49頁（2014年）

⑤上田香、藤木庸介、宮尾学：「「有松絞り」の認知度・印象に関する海外アンケート調査および海外進出「有松絞り」ブランドへの聴取調査」『京都嵯峨芸術大学・京都嵯峨芸術大学短期大学部紀』第41号、25-32頁、(2016年)